

1 学級づくりの基本

子どもたちにとっての学級は、「安心・安全で楽しい場所」であることが最も大切です。そのためには、児童生徒と教師が一緒になって、学校生活をつくりあげていく必要があります。学級開きや普段大切にしたいいくつかのポイントを紹介します。

ポイント①

素晴らしい出会いの場をつくる

教師が夢をもつことで、子どもたちも夢を描くことができます。学級開きに向けて、時間をかけて準備することを惜しまない教師でありたいものです。

① 出会いの準備を入念に行う

- ・自己紹介、所信表明の内容、オリエンテーション等、詳しく計画を立てましょう。
- ・学年で統一すべきものもあります。情報交換を行い、自分なりに工夫しながら準備を進めましょう。

② 毅然と、温かく、思いを伝える

- ・一年間を大きく左右する場面です。どんな一人一人、どんな集団になってほしいか、伝わるように話しましょう。
- ・有言実行。この場で言ったことは一年間、必ず守り通します。

③ 学級開き後の一週間を大切にす

- ・学級開きからの一週間で生活のルールを定着させます。「いつ、誰が、何を、どのようにするのか」を伝え、徹底させましょう。
- ・ルールは一年間変更しないことが基本です。

子どもたちの名前は確実に呼ぼう！

「出会いを大切にしています！」「あなたをしっかりと見ていますよ！」というサインです。

「角田」



「かくだ？」
「すみだ？」
「つのだ？」

子どもたちが求めるのは「安心・安全」です。他人を傷つけるような言動やいじめなどは絶対に許されないことを伝え、安心と希望を与えるようにしましょう。

生活のルールの定着とは？

- ・挨拶、時間など基本的な生活習慣
- ・日直の仕事、朝・帰りの会の進行
- ・給食の動きや当番活動
- ・掃除の仕方や分担
- ・学習用具や授業に関すること
- ・生活ノートの活用の仕方 など

《はじめの一ヶ月で行うべきこと》

- ①学級目標をつくり、学級への願いを共有する。
- ②当番活動を軌道に乗せる。
- ③朝・帰りの会で学級生活のリズムをつくる。
- ④班が学級生活の拠点となるようにする。
- ⑤係活動をスタートさせ、子どもの豊かな発想を取り入れる。
- ⑥良いことを評価しながら学級の規律を整える。
- ⑦楽しめる取組を企画し、みんなで実行する。
- ⑧「楽しく、分かる授業」を意識して展開する。

ここに注意！



- 子どもは・・・
 - ・期待や希望をもっている反面、緊張と不安も感じている。
 - ・仲の良い子とクラスが離れた子どもは、特に不安感が強い。
 - ・環境が変わること自体が、大きなストレスになる子どももいる。
- 教師として・・・
 - ・ルールの定着を先延ばししない。
 - ・ルールを勝手に変更しない。

ポイント②

みんなで決め、みんなでめざす学級目標をつくる

教師が学級目標に向かっていこうとする姿勢や気持ちを示すことが、「みんなでめざす」という気持ちを持続させます。絶えず学級の取組を見直しながら、全員で評価を積み重ねていくことが大切です。

①めざす学級への思いをもたせる

- まずは学級担任の「めざす学級像」や「一人一人への願い」を伝えましょう。
- その後、子ども一人一人の「学級への願い」を確認しましょう。全員分を学級通信に載せる、教室に掲示するなどの伝え方が考えられます。



②目標決定までのプロセスを大切に

- 類似意見を集約したり、入れたい言葉を抽出したりしながら、方向性をつくっていきます。安易に多数決で決めることは避けたいものです。
- 子ども一人一人に「自分がつくった」「自分も参加した」という思いをもたせましょう。

みんなで決めた学級目標の文字を各班に振り分け、班員で話し合い、工夫を凝らして文字を作成し、掲示しています。



③立てた目標を生かす

- 目標を色あせたものにしないよう、目標に込めた思いや意味を定期的に全員で確認しましょう。
- 行事は目標を生かす絶好のチャンスです。目標に向かい心を一つに取り組み意義を実感させましょう。

学級目標に対する個人目標の設定

学級目標は、意識され振り返ってこそ効果があります。学級目標を実現するためには、個人としてどう取り組むのか、個人目標を立て、振り返りの場を設定することが大切です。

ポイント③

やる気の出る朝の会、明日につながる帰りの会をつくる

朝の会は子どもにその日の目標と見通しをもたせる貴重な時間、帰りの会はその日の頑張りを評価し、明日へとつなげる大切な時間です。会を充実させ、学級を活性化しましょう。

①生活の基本を身に付ける場とする

- 挨拶、礼、返事、聴く姿勢、話し方など、生活や学習の基礎・基本を学ぶことのできる時間と考え大切にしましょう。
- めざす姿や指導の仕方については学年で確認し、統一しましょう。

②子どもが運営できるようにする

- 全員が会の進行役を行い、当番や係からの連絡など子どもたちの発言で進む会にしましょう。
- 子どもたちが互いの良さを認め合えるような場面をつくり、大切にしましょう。

③担任の思い、考えを伝える

- 信頼関係の構築のため、連絡や注意に留まらず、心にしみるような話をしましょう。
- 問題発生時や行事前後だけではなく、普段から学級の成果や課題にふれるようにしましょう。

ここに注意！



○教師として・・・

- 担任から笑顔で明るく「おはよう」と「さようなら」の挨拶を。
- 朝の会では表情や態度に表れやすい心の状態や体調を見逃さない。
- 帰りの会は、そわそわした雰囲気にならないよう、落ち着いた状況を整える。
- 「良かった（悪かった）です」のような振り返りにせず、具体的な話をさせる。
- 人前に出て話をするのが苦手な子どもへの配慮を欠かさない。

ポイント④

学級の「ルールとリレーション」をつくる

よりよい学級集団では、子どもが安心して過ごすことができ、他者との関わりの中で自らの良さを発揮できます。子どもが安心して過ごすことができるための「ルール」と、一人一人のちがいを認め支え合える「リレーション」の2つが確立していることが大切です。

ルール（規律）

- ・共有する目標がある
- ・一人一人に役割がある
- ・秩序がある

リレーション（親和的な交わり）

- ・認め合う関係がある
- ・互いに助け合う関係がある
- ・本音の感情交流がある

①ルールとその意義を確認する

- ・わかりやすく守りやすいルールにする。
- ・活動に入る前に確認する。
- ・短時間での意識化を繰り返す。
- ・提示し、視覚的に働きかける。

①教師から働きかける

- ・子どもの発言や頑張りを多面的に認める。
- ・大人しい子、目立たない子の意見もとりあげ、間違った答えなども大切に扱う。
- ・仲間の意見にうなずいたり拍手したりするよう働きかける。

②ルールに沿った行動をほめる

- ・ルールを守れている子たちをしっかりと承認する。
- ・ゲーム等の活動で、「ルールを守って活動したら楽しかった」という経験をさせる。
- ・逸脱行動に同調しがちな子をつくらない。

②場を工夫する

- ・自分の考えをペアやグループ内で発表する活動を取り入れる。
- ・分かったことや感想、なるほどと思った仲間の意見など、振り返る場面を設定する。
- ・子ども同士が認め合える場面を設定する。

③逸脱行動には毅然とした態度で

- ・まずは間をとり、冷静になる。
- ・簡潔に、毅然とした対応をとる。
- ・丁寧な個別対応は、授業や活動以外の場面で行う。

実践例
P67参照

③様々な活動を取り入れる

- ・学級〇〇大会、班対抗〇〇合戦、ビンゴゲーム等のイベントを子どもが企画運営する。
- ・構成的グループエンカウンター、短時間グループアプローチ等のエクササイズを行う。

ポイント⑤

「認める」ことでよりよい関係性をつくる

教師は、一人一人の気づきや発見に敏感でありたいものです。一人一人を認める姿勢は、個々の子どもたちの自信と可能性を伸ばし、さらに、子ども同士の良好な関係性を育みます。

子どもたちの良さを
見つけ評価する

- ・子どもたちが自分の気持ちや考えを表現できる機会を設けましょう。
- ・自他の良さに気付けるよう工夫しましょう。

生活ノート、日記、
日誌などを活用

努力したことを
学級全体に広げる

- ・子どもたちが目標に向けて努力したことの、取組のプロセス等を紹介しましょう。
- ・情報を収集し、多面的に捉えて紹介しましょう。

帰りの会、学級
だよりなどで紹介

集団の一員として
の役割をもたせる

- ・子どもたちが与えられた役割の中で自発的に取り組む場面を設定し、達成感や成就感をもたせましょう。

行事、係活動、当番
活動などの機会を利用

「自治的能力」を育む活動・行事をつくる

一人一人が役割を担う当番活動や係活動は、学級への帰属意識や自己有用感を育むことにつながります。また、学校行事でクラス内の望ましい人間関係を形成し、集団への所属感、連帯感を深めることなどを通して、子どもたちの「自治的能力」を育みたいものです。

①一人一人に役割を持たせる

- ・学級目標達成に向けて一人一人が役割を担い協力しながら自主的に活動することが、楽しく豊かな学級生活の実現につながります。
- ・「みんなの役に立った」「一緒に活動して楽しかった」など、活動を通して「仲間に認められ、学級に貢献している」という喜びを味わわせることを意識します。

②自主的に活動できるようにする

- ・「いつ、誰が、何を、どのようにするか」を明確にし、全員が分かるようにします。
- ・朝の会、帰りの会での活動状況の報告や、「委員会・係コーナー」等の掲示物を作成させ「見える化」することで、日常的にお互いに成果を認め合えるようにします。

③活動が見えるよう掲示を工夫する

- ・子どもの活動の様子、取組の跡が見えるような掲示になるよう心がけます。
- ・長期間貼りっぱなしにせず、破損やはがれはすぐに直します。
- ・発達段階に応じて子どもに工夫させながら掲示物をつくらせることも大切です。

④行事で集団の成長を図る

- ・一人一人に役割と目標をもたせ、全体のために取り組むよう指導します。
- ・「励まし」「認め合い」など、仲間に目を向けることの大切さを伝えます。
- ・運動会や合唱など、苦手に感じている子どもにも配慮します。結果や勝敗ではなく過程の大切さを理解させましょう。

ここに注意！



- ・活動を疎かにしている子どもに対する罰を与えるような指導をしない。
- ・活動が停滞する状況になった場合、何ができるかを一緒に考えるなど、子どもの出番を大切にする。
- ・乱雑な教室環境が子どもの帰属意識や意欲を低下させ、心の荒れを引き起こす。
- ・順位や勝敗にこだわりすぎると、子どもの人間関係が不安定になることがある。

初めてのことへの苦手意識が強く、なかなか思うようにできない子もいます。できるようになるまで根気強く指導する中で、子どもは育っていくものです。

【例えば通信では・・・】

子どもたちが互いの努力や成長を認め合い励まし合えるような内容を中心に書きます。

そのためにも、日頃から子どもの前向きな取組や学級のために行動している姿等を見逃さないようにしましょう。



子どもの中には「先生、頑張ったらご褒美がありますか?」「勝ったら〇〇してください!」などと言う場合があります。安易に応じることなく、

「結果以上に過程が大切」

ということを実感できる指導をしましょう。

学級集団に支えられて個が育ち、個の成長が学級集団を支えるという相互作用によって、一人一人が大きく成長します。クラス分けによって「偶然生まれた集団」を「チーム」と呼べる集団に成長するよう育てることが「学級づくり」であると捉えましょう。

2 「チームとしての学校」をめざして

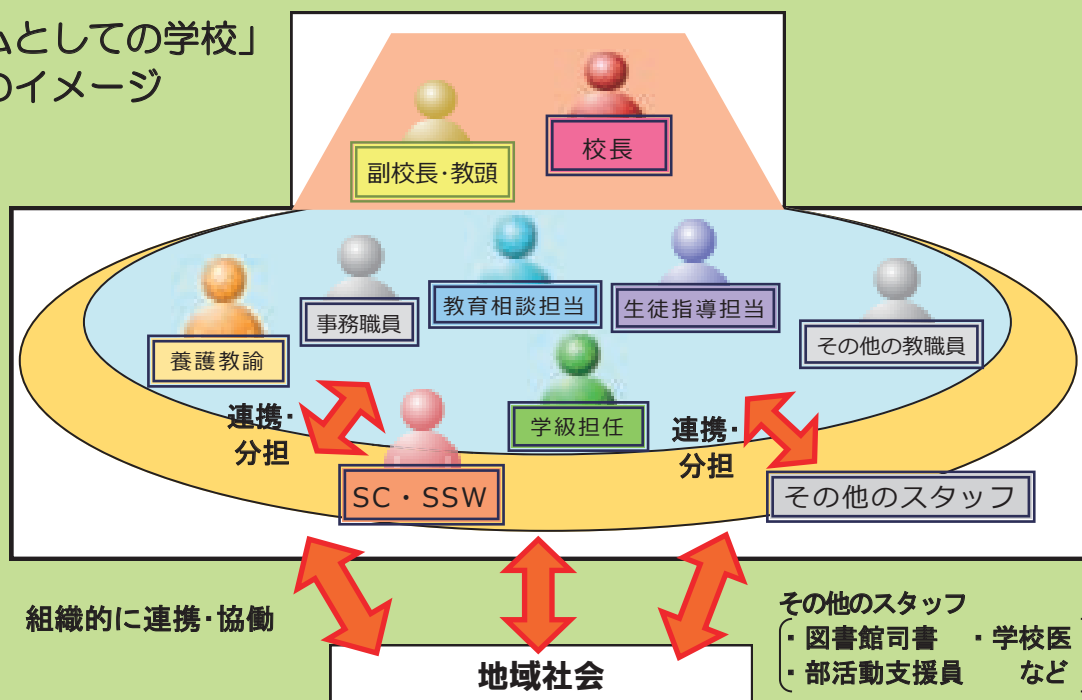
学校が、複雑化・多様化した課題を解決し、子どもに必要な資質・能力を育てていくためには、学校全体のマネジメント機能を高め、組織として教育活動に取り組む体制を作り上げるとともに、指導体制を整備することが必要です。

ポイント①

「チームとしての学校」の体制を構築する

生徒指導上の課題に対して教職員が個別に取り組むのではなく、校長のリーダーシップの下、チーム学校としての自らの役割を自覚し、課題解決に向けて組織で取り組むことが重要です。

「チームとしての学校」のイメージ



(文部科学省「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策」(H27答申)をもとに作成)

※上図のそれぞれの役割と以下の説明文は同色で対応しています。

《学級担任の役割》

児童生徒の課題を少しでも早く発見し、課題が複雑化・深刻化する前に指導・対応できるように学級担任には児童生徒を観察する力が必要です。

《教育相談担当の役割》

全児童生徒の状況及び支援の状況を一元的に把握し、学校内及び関係機関等との連絡調整、スクリーニング会議、ケース会議の開催等児童生徒の抱える課題の解決に向けて調整役として活動します。

《生徒指導担当の役割》

学校全体で生徒指導を行う上で、情報(収集・集約、整理、発信)のキーパーソンであることを自覚し、校長・教頭及び学級担任等と連携して、実態把握を行います。

《養護教諭の役割》

全児童生徒を対象として、入学時から経年的に児童生徒の成長・発達に関わっており、健康相談等を通じ、課題の早期発見及び対応を行います。

《事務職員・その他の教職員の役割》

学級担任以外の教職員は、児童生徒の小さな変化に気付いたり、気になる状況を目にしたり、相談を受けたりした場合には、早急に教育相談担当等に報告します。

ポイント②

専門性に基づくチーム体制を構築する

生徒指導の充実を図るために、教員が、心理や福祉等の専門家と連携・分担し、チームとしての体制を構築することが求められています。

【チーム体制の構築】

教員もSC・SSW等も「チームとしての学校」の一員として目的を共有し、取組の方向性をそろえる。

○それぞれの職務内容、権限と責任を明確化する。○立場・役割を認識し、当事者意識をもつ。



取組の効率的・効果的な実施につながります。

【学校における協働の文化】

教員が担うべき業務や役割を見直し、他職種による協働性を高める。

～教員～

- ・学習指導や生徒指導の教育活動。
- ・少数職種であるSC、SSW等を学校全体として受け入れる。

～SC、SSW等～

- ・子どもの教育を担っているチームの一員であるという意識。
- ・学校の仕組みや指導のしかたや支援について積極的に理解する。

スクールカウンセラー（SC）は、「心理」の専門家

- 心理に関する専門的な知識や技術を有しています。
- 課題を抱えた児童生徒等に対して、心理的側面から様々な技法を用いて主にカウンセリング、情報収集・見立て、助言・援助を行い、課題解決への対応を図ります。
- 中学校区に所属し、各学校の要請等に応じて面談や心理教育の助言等を行います。



スクールソーシャルワーカー（SSW）は、「福祉」の専門家

- 社会福祉に関する専門的な知識や技術を有しています。
- 課題を抱えた児童生徒等に対して、その置かれた環境への働きかけや関係機関等とのネットワークの構築など、多様な支援方法を用いて課題解決への対応を図ります。
- 市町教育委員会に所属し、学校を巡回したり要請等に応じて派遣されたりします。（東部地区）



ポイント③

専門機関と連携して取り組む

複雑化・多様化した生徒指導上の問題に対応していくためには、警察や児童相談所などの専門機関との連携が欠かせません。各機関の取組内容や人的資源などが異なりますので、校長の判断の下、適切に連携を進めていきましょう。

～専門機関の例～

- ①刑事司法関係（警察署、少年サポートセンター、法務少年支援センター）
- ②福祉関係（児童相談所、児童心理治療施設等）
- ③教育相談機関（教育支援センター、対策センター）
- ④その他の諸機関等（愛護センター、医療機関等）

「連携」とは何か問題があった場合に「対応のすべてを相手に委ねてしまうこと」ではありません。学校で「できること」「できないこと」を見極め、学校ができない点を外部の専門機関などに援助してもらうことが連携なのです。（文部科学省「生徒指導提要」より）

「チーム学校」として学校全体のマネジメント機能を高め、教育活動を充実させましょう。

3 新たな不登校を生まない取組

不登校を減らすには、予防的な対策が必要です。「未然防止」と「初期対応」について全教職員が正しく共通理解し、普段から意識して取り組んでいくことが、新たな不登校を防ぐことにつながります。

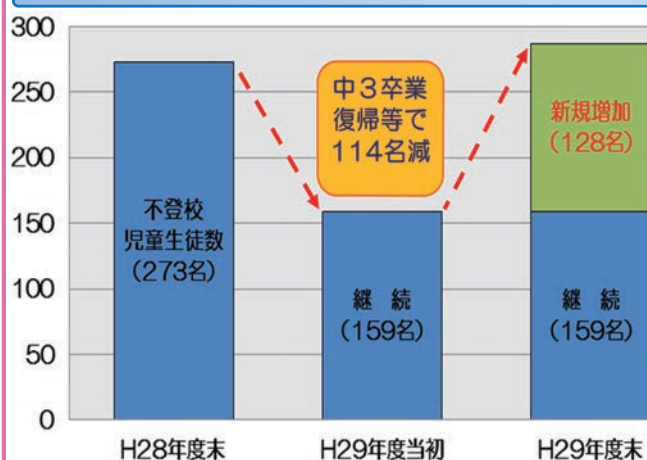
ポイント①

「魅力ある学校」をつくる

東部地区の不登校児童生徒数（「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」の基準による30日以上欠席）の推移を見ると、平成29年度当初は、卒業や復帰等で114名減少していますが、**年度中に128名の児童生徒が新たに不登校になり、年度末には前年度を14名上回りました。**この結果から、不登校児童生徒に対する手厚い支援はこれまで同様大切ですが、「新たな不登校を生まない」取組も重要であるということが分かります。

そこで、児童生徒が「学校は楽しい」「学校に行きたい」と感じられるような**「魅力ある学校づくり」**を進めることが大切になります。その**4つのポイント**とチェック項目を紹介します。

東部地区の不登校児童生徒数の推移
(H28年度及びH29年度「県独自調査」より)



「魅力ある学校づくり」のポイント



① 教員の基本姿勢

- どの子に対しても公平に認め、ほめ、励ましていますか？
- 小さな問題行動であってもその行為を見逃さず、毅然とした指導を行っていますか？
- 気になる子に対して、担任だけの見方ではなく、複数で様子を観察したり対応を検討したりしていますか？



② 学ぶ意欲の向上と基礎基本の定着

- 考える視点や学習活動の手順などを明確に示し、児童生徒が見通しを持ち、主体的に学習に取り組めるようにしていますか？
- 教え合い、学び合う授業を行い、子どもどうしの「つながり」や「自己有用感」を育むよう工夫していますか？
- ノートの書き方や発表の仕方、家庭学習の仕方など、学び方を年度当初に丁寧に指導していますか？



③ 「居場所づくり」と「絆づくり」

- 年度当初の信頼関係を築くための取組や、構造的グループエンカウンターやソーシャルスキルトレーニング等、子どもたちの人間関係を促進する取組を計画的に行っていますか？
- 全員が静かに考える時間やお互いの意見を伝え合い聴き合う時間を設け、子どもたちに自分と向き合い相手を思いやる力が身につくよう努めていますか？
- 役割や仕事を公平に分担したり、発表の機会を与えたりして、一人一人が活躍できるような指導ができていますか？



④ 援助ニーズに応じたきめ細やかな配慮

- 問題行動等の要因を、特別支援教育の観点も踏まえて多面的に把握しようとしていますか？
- 個々のつまずきの状況を把握し、個に応じた支援の手立てを用意するようにしていますか？
- 進級・進学前に、特性や必要な支援について情報を引き継ぎ、支援に生かしていますか？

ポイント②

子どもの心の変化（サイン）をキャッチする

新たな不登校を生まないためには、日頃から子どもたちの生活全般の様子、心身の健康状態、悩み事等の把握に努める必要があります。「子どもたちの心の変化（サイン）」をキャッチするための方法を複数のチャンネルで確保しておきましょう。

「子どもたちの心の変化（サイン）」をキャッチする取組例

- 子どもたちとの日常的な交流：挨拶や声かけの際の反応、休み時間の過ごし方など
- 毎朝の出席確認・健康観察：健康観察への返事の声、担任の顔を見て答えているか
- 日記・生活ノート等によるやりとり：記述の内容、字の様子
- 定期的な教育相談やアンケート：特に変化の見られやすい5・6月、9・10月は大切に
- 学級や個々の状態を把握するアセスメントツール：教員の「目」や「勘」の確認や修正

「おかしいな？」と思ったら・・・

- 子どもの心や気持ちをつかむよう、声かけをする。
- 先生が気にかけていることを伝える。
- 家庭に電話したり、家庭訪問をしたりするなどして様子を聞く。
- 担任一人の見方だけではなく、複数の教職員で観察したり対策を検討したりする。

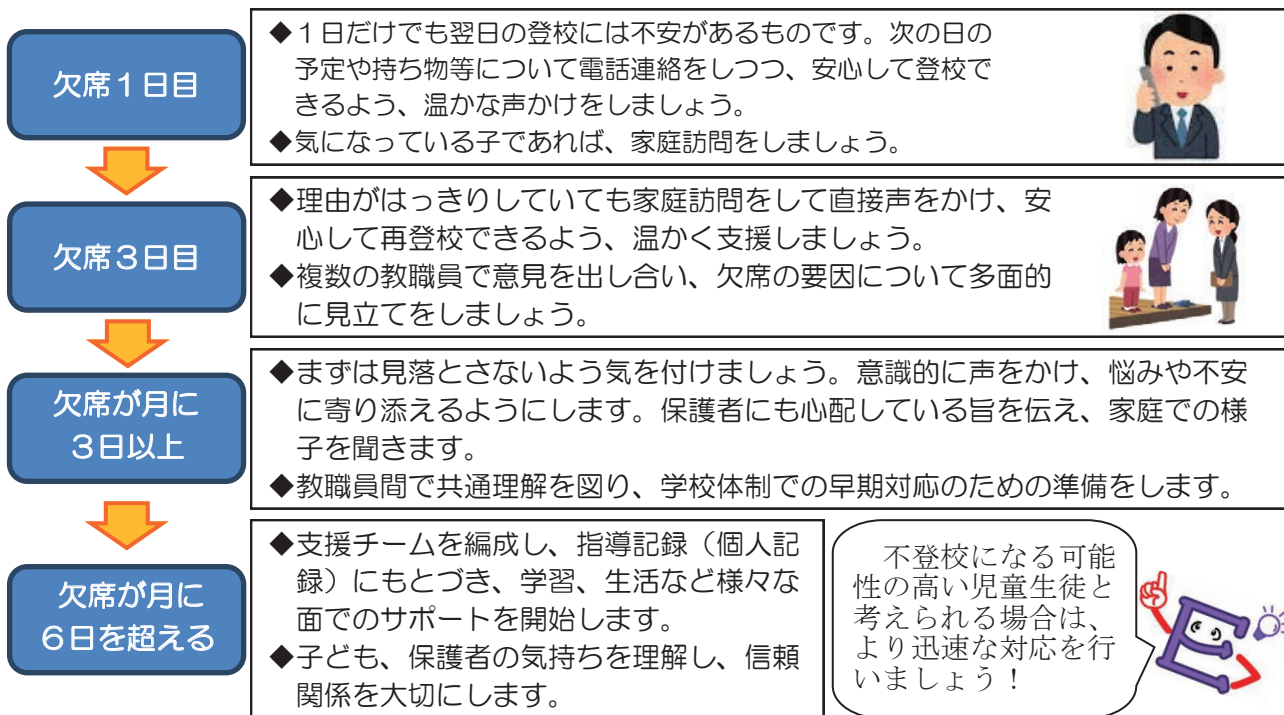


ポイント③

1日の欠席にも敏感に対応する

不登校の兆候を見逃さないためには、「子どもは基本的に毎日登校するもの」という意識を持ち、欠席に対して敏感に、かつ温かく対応することが大切です。微熱や腹痛等による欠席の中に、不登校につながる要因が隠れていることもあるものです。

欠席児童生徒に対する対応の方法（例）



児童生徒の様々な変化（サイン）に敏感に反応できるアンテナを高く持ち、磨くことが大切です。

4 いじめを見過ごさないために

「いじめ防止対策推進法」が施行された後も、いじめが重大事態に至る事案が全国で相次いでいます。いじめは、どの児童生徒にも、どの学校でも起こりうるということを踏まえ、全ての児童生徒を対象とした学校組織全体としての取組が必要です。また、日々の未然防止の取組や積極的ないじめの認知が大切となります。

いじめ防止の考え方

【ハインリッヒの法則】

1つの重大事故の背景には29の軽微な事故があり、その背景には300のヒヤリハット事象がある

【プロアクティブの原則】

- ①疑わしきときは行動せよ
- ②最悪事態を想定して行動せよ
- ③空振りは許されるが、見逃しは許されない

重大な事故は、軽微な事故を全力で防いでいけば発生せず、軽微な事故は、ひやりとするような事故を防げば発生しない。



ポイント①

「いじめはあるもの」という認識を共有する

いじめは、大人が気付きにくい時間、場所、形態で行われることが多いため、些細な兆候であっても、早い段階からの的確に関わりをもち、積極的に認知することが大切です。

かつてのいじめの定義

- ・「自分よりも弱い者に対して一方的に」
- ・「身体的・心理的な攻撃を継続的に」
- ・「深刻な苦痛を感じている」

現在のいじめの定義

- ・「当該児童等と一定の人的関係にある」
 - ・「心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）
 - ・「児童等が心身の苦痛を感じている」
- ※「いじめ防止対策推進法」第2条（平成25年）より

現在の「いじめ」の捉え

いじめの芽

いじめの兆候

かつてのいじめ

「短期間で解決したもの」や「意図せず好意から相手を傷つけてしまったもの」も含まれます。より広範囲に捉えていきましょう。

いじめの発見については、学年が上がるほど教職員の発見や保護者の訴えからの発見が少なくなり、いじめが見えにくくなります。いじめはふざけや遊びを装ったり、SNS上の書き込みなど、大人が気付きにくい場所や形で行われる場合があるからです。「いじめはあるもの」という考えのもと、学校の実態に合わせた早期発見のシステムづくりを工夫していく必要があります。また、いじめの認知件数が多いことは、教職員の目が児童生徒に行き届いていることの“あかし”でもあります。

そして、未然防止のために、いじめを受けている、いじめを目にした児童生徒の声を一つでも多く拾うために、アンケート調査を行うことも有効です。

ポイント②

定期的なアンケートを実施し、的確に分析する

組織で迅速に対応することがいじめの兆候等の発見につながります。アンケート調査の目的を教職員で共通理解し、その結果を的確に分析することが大切です。

こころのもよう メッセージ

- ・これは、みなさんの心の状態を伝えてもらうためのシートです。
- ・今の正直な気持ちに○をしてください。

1. わたしは今、困っていることがある。

- ある (2へ)
- どちらかといえばある (2へ)
- あまりない (3へ)
- まったくない (3へ)

2. 「ある」「どちらかといえばある」と答えた人は、何についての悩みか教えてください。

- 勉強のこと
- 友だちのこと
- 家庭のこと
- 部活動
- その他

3. 「あまりない」「まったくない」と答えた人は、今の気持ちについて一つ○をつけてください。

- 楽しい
- まあまあ楽しい
- ふつう
- あまり楽しくない

これは一つの例です。自由に記述する欄を設けても構いません。ただし、その時には、全員が書くことのできる質問事項（今、頑張っていること等）にするなどの配慮が必要になります。

アンケートから何を読み取るかを教職員で**共通理解**しておくことが重要です。

必ずしも「アンケート」や「調査」という言葉を使わなくてもよいです。

○がどこにつくかによって、どのように対応するかを前もって考えて共通理解しておく必要があります。あらゆる可能性を考えて子どもにアプローチをしていくことが大切です。

～対応例～

質問2で部活動に○がついた場合、顧問との連携が必要になります。また、友だちのことやその他に○がつけば、いじめの可能性も考えて聞き取りなどをします。

質問3で「あまり楽しくない」に○がつくと、困っていることはなくても何か悩みを抱えていると捉え、様子を見守りつつ、必要に応じて聞き取りをしましょう。

【アンケート実施上の留意点】

- 簡潔で速やかに実施・集計できるものを、繰り返し実施することが望ましい。
- 家庭に持ち帰り、翌日封筒に入れて提出すると、記名式でも書きやすい。
- アンケート内容を確認した後、担当が集約し、学校いじめ防止対策委員会（仮称）へ提出する。
- アンケートの回答状況を情報交換し、その対策について相談し合うことが必要である。
- 重大事態への発展を防ぐためにも、なるべく短い期間での定期的な実施が望ましい。

「児童生徒に投げ返してみる」

児童生徒の実態に応じて、集会等でアンケート結果を児童生徒に投げ返し、教職員が心配していることをしっかり伝え、児童生徒の思いを真摯に受け止めるというメッセージを発信することも考えられます。

～アンケート実施の効果～

- ・いじめの早期発見
 - ・いじめの抑止の機会
 - ・児童生徒とのパイプづくり 等
- 様々な効果があります。定期的に行っていきましょう！



ポイント③

いじめへの対応は組織で行う

些細な兆候を発見したり、いじめの相談を受けたりした教職員が一人で抱え込まず、組織で対応するために、情報を集約・整理する担当を設けます。

【いじめの情報を集約する担当の目的と役割】

- 個々の教職員が抱え込まず、学校いじめ防止対策委員会（仮称）による認知を機動的に行うことを目的とする。
- いじめが疑われる情報を集約し、管理職へ報告することで、正確な実態把握と組織としての判断を得る。
- 組織としての判断を得たのち、その判断に基づいた動きを学校体制で行うといった仕組みを機能させる。

この担当は、校種・学校規模等の実態に合わせて校長が決定します。

教職員が、様々な場面で気付いた児童生徒の変化やトラブルの全てが組織の情報を集約する担当に集まるようにしましょう。



1 発見

いじめが疑われる情報のキャッチ

<具体例>

- ・いじめが疑われる言動
- ・理由がはっきりしない欠席
- ・生活ノート等の気になる内容
- ・アンケートの回答結果
- ・元気がない、表情が暗い等の様子
- ・本人や保護者からの訴え
- ・他児童生徒、教職員からの訴え



2 情報収集

情報を集約する担当へ報告

正確な実態把握と協議

情報の集約・整理

- ①いつ（休日を含む） ②どこで（学校内外を問わない）
- ③誰が（被害者） ④誰に（加害者） ⑤態様（行為）
- ⑥心情（被害者） ⑦現在の状況

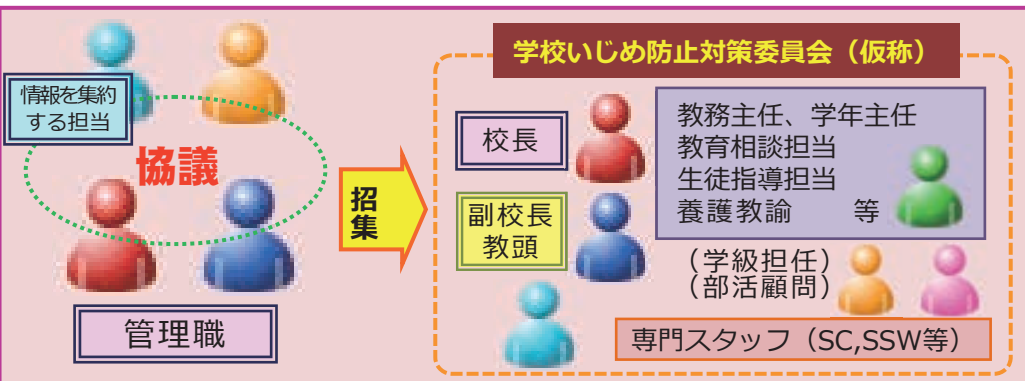


情報を集約する担当

3 指 導 方 針 の 認 知 と 決 定

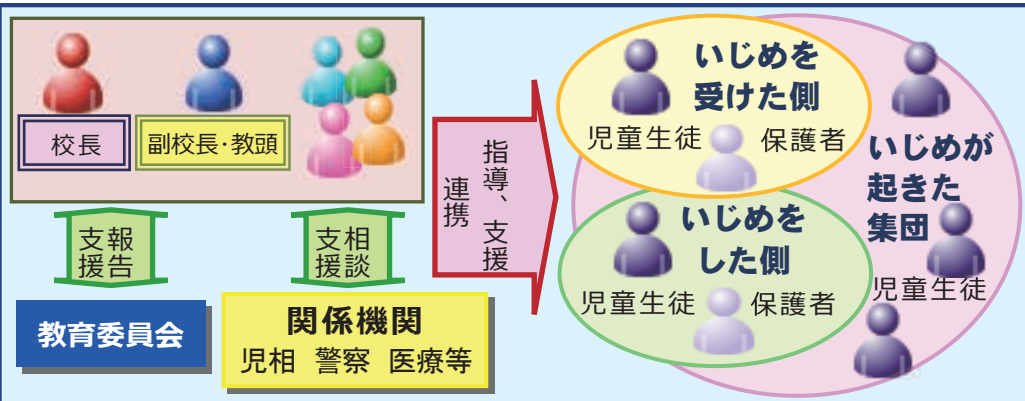
組織によるいじめの認知

指導体制及び方針の決定



4 いじめへの対応

いじめ対策組織による対応



教職員が一人で抱え込まず、情報を共有し、組織で判断したり対応したりすることが重要です。さらにいじめが解決したと思われる場合でも、継続して十分な注意を払い見守っていくことが必要です。

5 心の成長を支える教育相談

教育相談は、校内の教育相談体制を整備し、教職員が専門スタッフと連携しながら、課題を抱えた児童生徒を組織として支援するとともに、学級担任が日常的なあらゆる教育活動の中で、児童生徒一人一人に対して相談活動を行うものです。教育活動全体を通して児童生徒に寄り添い、心の成長や発達につながるように支援することが大切です。

ポイント① 教育相談コーディネーター中心の支援体制をつくる

児童生徒の問題行動等の背景には、心の問題とともに、家庭、友人関係、地域、学校など環境の問題があり、これらの問題は複雑に絡み合っています。SCやSSWといった専門スタッフの視点も加えて様々な情報を整理統合し、アセスメント（見立て）やプランニング（解決に向けた目標設定と具体的な手立て）をした上で、課題を抱えた児童生徒の支援を組織として行うことが重要です。

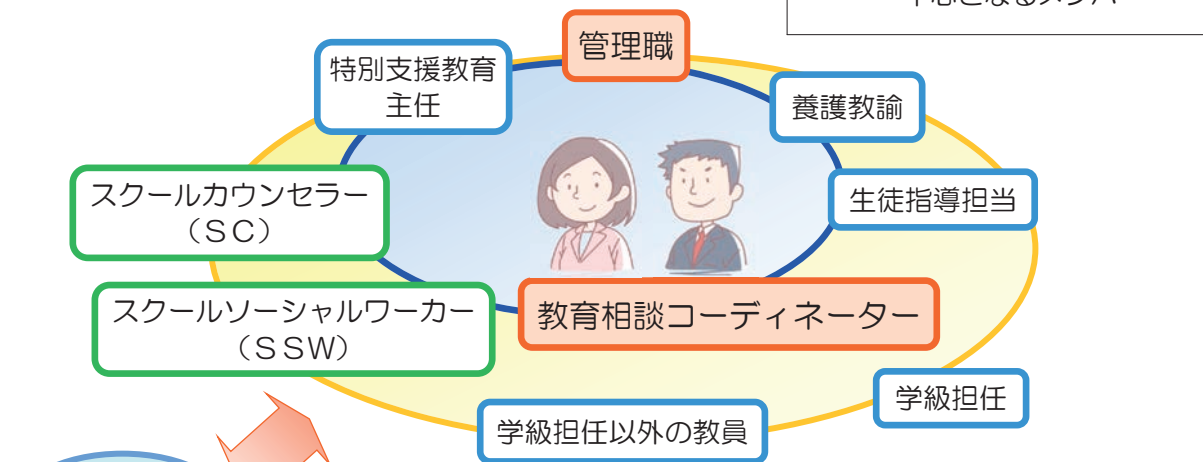
教育相談コーディネーターの役割

- 校内支援のあり方について管理職に相談する。
- 学級担任に気になる児童生徒の状況を書き出してもらったり、直接、聞き取ったりして、学校全体の児童生徒の状況及び支援の状況を一元的に把握する。
- 相談活動に関するスケジュール等の計画・立案を行うとともに、専門スタッフの来校のない間の様子を記録しておき、専門スタッフに伝えられるようにする。
- スクリーニング会議・ケース会議等の会議の運営を行う。
- 学校内（SC、SSWを含む）及び関係機関等との連絡調整を行う。
- 教職員の教育相談力向上のための校内研修を実施する。

児童生徒の課題解決に向けた校内支援体制の中心となるのが教育相談コーディネーターです。教育相談担当教員が担当したり、教頭や養護教諭又は特別支援教育主任が兼ねたりするなど、学校の実情に応じ柔軟な配置が考えられます。



【教育相談体制の例】



関係機関

児童生徒の小さな変化や気になる状況を目にしたら、教育相談コーディネーターに報告します。



専門スタッフとの連携

〈専門スタッフと効果的に連携するために〉

- それぞれの役割を理解した上で相談する（コンサルテーションを受ける）ことが基本ですが、わからないときはどの専門スタッフでも構わないので、少し話をしてみるとよいでしょう。話をすることは、より適切な専門スタッフへつなげるきっかけとなります。
- 聞きたいことをまとめておくと、短時間でも効果的なコンサルテーションとなります。
- 相談した児童生徒の経過は、専門スタッフにも伝えるようにします。専門スタッフが情報を共有することで、次の相談がスムーズになるだけでなく、継続的な多角的支援となります。

連携の中心となるのは、教育相談コーディネーターですが、担任が専門スタッフに直接相談してもかまいません。



日頃からSCやSSWとの信頼関係を築いていくことが、スムーズな支援につながります。日常の何気ない情報交換が大切です。

ポイント②

課題の要因や背景に迫る組織的支援

児童生徒をめぐる状況が複雑化・深刻化しているため、児童生徒の抱える課題の要因や背景を心理・発達面のほか、家庭生活・学校生活全体の中から見つけようとする考え方が必要です。この考え方にに基づき、未然防止、早期発見及び早期支援に重点を置いた組織的検討を行うことで、問題の要因や背景に目を向けた具体的な支援につながります。

1. スクリーニング会議の実施（全児童生徒対象）

- 気になる（支援が必要な）児童生徒を早期から組織として把握する。
- スクリーニングシート等の活用により、教職員から収集した情報を整理。
- ケース会議の開催の必要性を協議。

スクリーニング会議の活用は一例です。学校の実態に応じて工夫することが大切です。

2. 初回ケース会議の実施（不適応の兆しまたは支援の必要な児童生徒対象）

- 児童生徒への支援策を検討・検証していく。
- アセスメント（情報からの要因分析と見立て）を行う。
- プランニング（解決に向けた目標の設定と具体的な手立て）を行う。



担任等による支援・見守り（不適応の兆しはあるが、すぐに支援の必要のない児童生徒対象）

3. プランの実行

4. 継続ケース会議の実施（不適応の兆しまたは支援の必要な児童生徒対象）

- 取組の効果の検証を行い、目標の見直しや手立てを修正（振り返り・見直し）
- 新たな課題に向けたチーム構成員の変更なども検討。
- *ケース会議を複数回開催することにより、状況の変化に応じた柔軟な対応が可能となる。



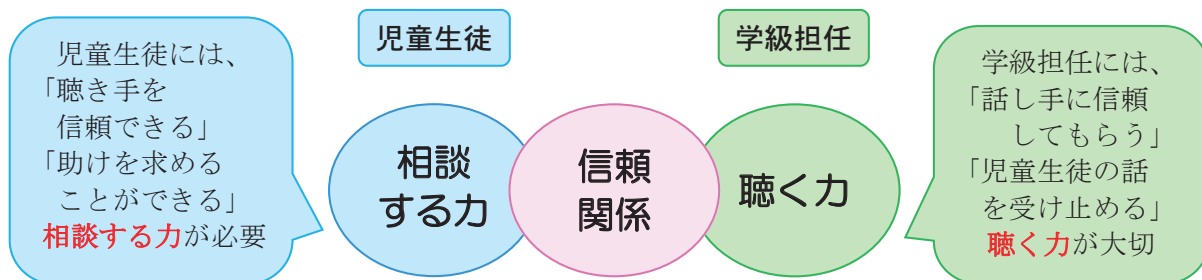
SC・SSWは可能な限りスクリーニング会議やケース会議に出席し、専門的立場から助言を行います。

ポイント③

学級担任のカウンセリングは 児童生徒の成長を思い描きながら

学級担任が行うカウンセリングは、個別の会話・面談や言葉がけ等の対話を通して行います。全ての児童生徒が学級の生活によりよく適応し、豊かな人間関係の中で有意義な生活を築くことができるよう、児童生徒一人一人の興味・関心を踏まえ、個々の児童生徒が抱える発達や学習の課題を受け止めながら、その解決に向けて支援することが重要です。

カウンセリングは児童生徒と学級担任の信頼関係のうえに



カウンセリングで最も大切なことは「傾聴」と「共感」

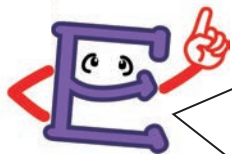
★「傾聴」とは、こちらが「聞きたいことを聞く」のではなく、「相手が言いたいこと、分かって欲しいこと」を受容的・共感的態度で「聴く」ことです。評価や助言より、まず聴くことが大切です。

〈聴き上手になるために〉



【態度】

- ・相手に体を向け、目線を自然に合わせる、相づちを打つ、うなずくなど「全身であなたの話を聴いている」というメッセージを伝える。
- ・ゆっくりした口調で、リラックスして話しやすい雰囲気をつくる。



人には他人に近づかれると不快に感じるパーソナルスペースとよばれる空間があります。パーソナルスペースは、人によって異なります。

異性の児童生徒のカウンセリングを行う際は、近づきすぎて不快感を与えないよう適切な距離を保つよう配慮します。



【心構え】

- ・反論や批判はせず、児童生徒のそうせざるを得ない気持ちを受容する。
- ・相手の言ったことを繰り返したり、自分の感じたことを言葉で伝えたりして共感的に聴く。
- ・相手の非言語的な表現（声の調子・表情・姿勢・手や目の動き）にも、気を配る。

★「共感」とは、価値観や先入観にとらわれることなく、相手の体験や価値観を理解しようとすることです。

《共感と同感の違いに注意！》



共 感

≠

同 感

あなたはそう感じるのね
主語が「あなた」
あなたと私、違ってOK
個々の存在感

私もそう感じる
主語が「私」
あなたと私、同じである
一体感

話を聞いてもらうことで、①スッキリする、②担任との信頼関係が深まる、③自己理解が深まる、④問題解決に向かえる、などの効果が期待できます。

児童生徒に気づきを促す意図をもった対話

◇児童生徒の成長した姿を思い浮かべ、「この児童の〇〇な能力を伸ばしたい」「この生徒には〇〇なことに気づかせたい」と意識し、児童生徒の成長を目的とした意図をもった対話を行うことで、スクールカウンセラーとは違う教師らしいカウンセリングとなります。

◇児童生徒は、漠然と感じていても言語化して表現できないことがあるため、「教師の対話的関わり」が必要です。漠然と感じていたことを言語化することは、自分の思いや考えをはっきりさせ、気づきを促す効果があります。

〈気づきを促すために〉

- ・教師がかけた言葉によってどのような対話の展開になるか、児童生徒が最後にどのような気持ちになるかをイメージしながら、発達段階を踏まえた言葉かけを行う。
- ・児童生徒にかけた言葉に対して、黙ってしまったり、「けど」「でも」「だって」など反論や言い訳の言葉が出てきたりしたら、児童生徒の気持ちに寄り添えていないサインです。

◆◆児童生徒の気持ちに寄り添えていない例◆◆

放課後、暗い表情で学級担任のところにやってきた生徒が
呟くように言いました。

生徒：あっ、あの、先生、明日の英検に合格できるでしょうか。

① 担任：大丈夫！

生徒：でも…。

② 担任：もし、落ちて、また頑張ればいいんだよ。

生徒：けど…。





前ページの例は、 なぜ、生徒の気持ちに寄り添えていないのでしょうか？

放課後、学級担任のところにやってきたこの生徒は、試験直前の不安な気持ちを自分のことを日頃よく見てくれている担任の先生ならわかってくれると思います、他の教員ではなく担任に話をしたかったのではないかと考えられます。

- ①は、試験直前で不安になっている生徒に対し、励まそうと思って「大丈夫！」と言葉かけをしたのですが、不確定なことを断言してしまったため、不安が増して「でも…」という言葉が出たのだと思われます。
- ②は、気楽な気持ちで受験してほしいと思い、「もし、落ちても、また頑張ればいいんだよ。」と言葉かけをしたのですが、頑張っ合格したいという思いが強すぎて不安になっているのに対し、不合格を前提に話され、反論したいのと不安な気持ちが入り混じって「けど…」という言葉が出たのだと思われます。



この他に「何とかなる！」「心配するな！」「あなただけじゃないよ。」「とにかくがんばれ。」などの言葉も使う場面に注意が必要です。
また、児童生徒の気持ちに寄り添えているかだけでなく、生徒が自己理解を深めたり、前向きな意思決定ができるかどうかを考えることで、より発展的な展開となります。

◆◆児童生徒の気持ちに寄り添えている例◆◆

放課後、暗い表情で学級担任のところにやってきた生徒が
呟くように言いました。

生徒：あっ、あの、先生、明日の英検に合格できる
でしょうか。

担任：教室に残って勉強したり、英語の先生のところに
質問しに行ったりして、今まで頑張ってきたよね。

生徒：うん、あっ、はい…。
それでも、なんか、大丈夫かなっていうか、不安なんです。

担任：そうか、試験できるかなって感じで、不安なんだね。
今日の夜は、早めにお風呂に入って、早く寝るようにすると、
明日、今まで頑張ってきた成果が出ると思うよ。

生徒：はい、今日は早く寝るようにして、明日は精一杯頑張ります。



上の例では、生徒の普段の様子を見ていたからこそできる、学級担任らしい言葉かけをしたことによって、生徒は不安な気持ちを言語化することができています。そして、その気持ちを受け止め、今できることを助言することによって、前向きな意思決定を促すことへとつなげています。

個別の会話・面談や言葉かけ等の中で気になる事柄があった場合は、一人で抱え込まず、管理職や学年主任、教育相談コーディネーター等に報告・相談し、学校組織全体での支援につなげるようにすることが大切です。

6 学級づくりの実践例

学級づくりに関わる実践例として、これまで東部通信に掲載した取組を紹介いたします。どちらも児童生徒の主体的な活動とすること、教職員が一枚岩となって取り組むこと、取組が形骸化しないよう努めることなどを大切に、着実に成果を積み上げてきています。

① 短時間グループアプローチ

さくさく

桜咲タイムで、対話的な学習スキルの習得を

鳥取市立桜ヶ丘中学校



桜ヶ丘中学校では、平成28年度より「桜咲タイム」と名付けた短時間グループ・アプローチの実践に取り組んでいます。活動を通して、生徒が自他理解を深めると共に自尊感情を高め、質の高い学習集団を育成していくことをめざしています。さらに、平成29年度からは、この取組を中学校区の4つの小学校でも始めています。

短時間グループ・アプローチ

- ★毎週水曜日5校時終了後
- ★10分間
- ★全校一斉

「アドジャン」「二者択一」等の構成的グループエンカウンターとソーシャルスキルトレーニングの要素を取り入れた活動。



意識するポイント

- ねらいの提示と振り返り活動の充実
- 話し合いの『型』を身に付けさせる

【話し合いの『型』】

- ・始めと終わりの挨拶
- ・うなづく(受容する)
- ・視線(相手を見る)
- ・表情(笑顔で)
- ・机の合わせ方



学習規律の向上
対話的な学習スキルの習得
良好な人間関係の構築

めざす姿

質の高い学習集団

<これまでの成果>

- ◇話し合いの『型』や学習形態としてのグループが、学習場面で活用されている。
- ◇一体感のある活動のため学級・学年の集団づくりに効果的であった。
- ◇小学校6年生への出前授業(桜咲タイム)の実施により、中1ギャップの解消につなげている。

<今後の取組の方向性>

- ◇桜咲タイムの定着と充実
- ◇話し合いの『型』を学習場面に積極的に活用できる子どもの育成
- ◇小・中学校の連携によるグループ学習の活性化

「対話的な学習スキルの習得」により、生徒はグループでの活動に慣れ、安心した関係の中で意見交換や教え合いが行えるようになってきています。この取組を中学校区の4つの小学校にも広げることで、共通のゴールイメージのもとに9年間を通して、学習スキルの習得と社会性の育成に取り組んでいくことができます。中学校区の創意工夫のある様々な取組は、小学校から中学校へのスムーズな接続にも大いに効果があるものと期待されます。

東部通信145号

(H29.9月)より



桜ヶ丘中校区4小学校(面影小、米里小、津ノ井小、若葉台小)における実践



☆ 桜咲タイムの流れ

① はじまり

毎回「挨拶をする」「うなずきながら聴く」「説明をよく聴く」など、活動のルールを確認します。

「今日は特に話をする友達の顔をしっかりと見て聴くことを頑張りましょう」など、クラスの実態に応じてねらいを絞って取り組むこともあります。



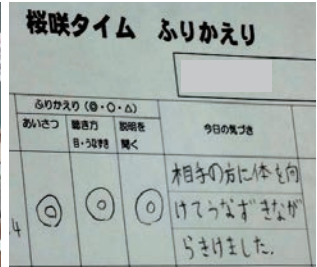
② 活動

しっかり考える、理由をつけて話す、聴き合う、相手の顔を見る、どちらかを選ぶなど、子どもたちは楽しみながらねらいを達成していきます。「話す・聴く」が安心してできる関係性が築かれています。



③ ふりかえり

活動の内容だけではなく、「うなずきながら聴けた」等対話的な学習スキルに関する感想を求めます。ふりかえり用紙に書く学級もあります。



☆ 共通実践していること

- ・アレンジしたり特別なルールをつくったりせず、**みんなが同じことを同じ時にすること**を心がけています。
- ・形骸化することなく続けていくために、**教員も児童も負担なく取り組みやすい活動**になるようにしています。
- ・**教員の出番は「価値付け」**です。ねらいに沿った子どもを褒め、認めることを大切にしています。



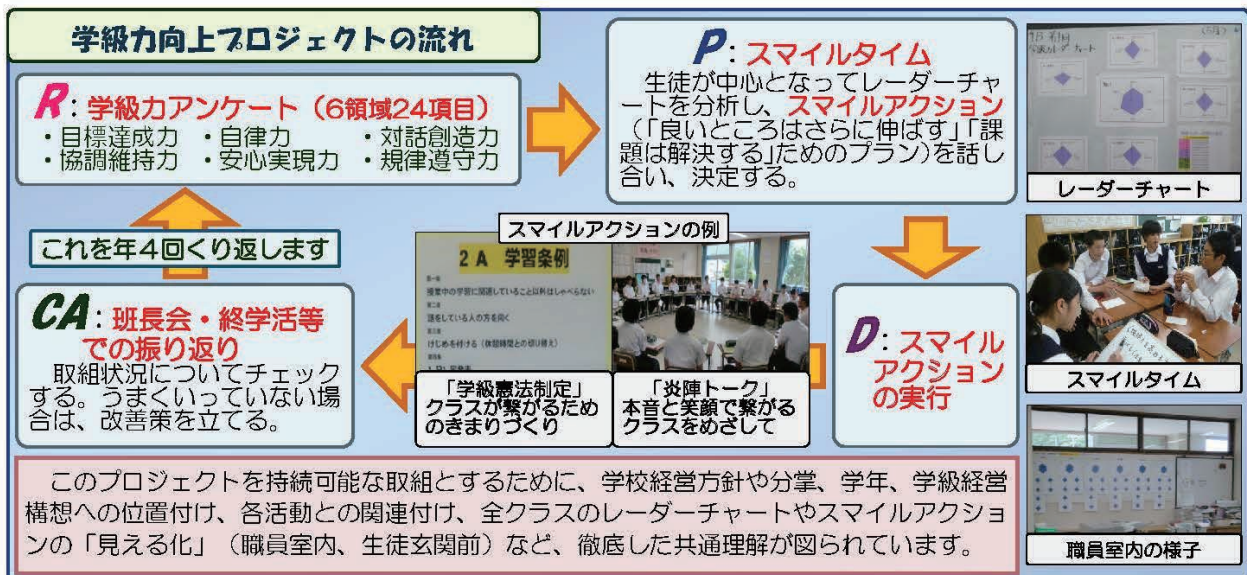
② 学級力向上プロジェクト

生徒を主人公とした学級、学校づくり

鳥取市立千代南中学校



千代南中学校では、平成25年度から「学級力向上プロジェクト」を実施しています。R-PDCAサイクルに沿い、生徒が主人公となって学級の様子をセルフ・アセスメントし、実践的な仲間づくり活動を行うことを通して、生徒の主体性・自主性、対話力・人間関係調整力を育む取組が進められています。



「学級に支えられることで個が育ち、個の成長が学級を発展させるという相互作用で学校は成長する」ということが実感できる取組であり、プロジェクトが色褪せないよう努める教員の強い思いや団結力があって成り立つものです。生徒を主人公とした学級、学校づくりには、脇役に徹して支え励ます教員の姿があります。平成29年度より、生徒会が中心となって、授業改善や学力向上を目的とした「学校改善プロジェクト」も始まりました。また、平成30年度は各学級のスマイルタイムがより効果的に運用できるように、全教職員によるアンケート分析「スマイルミーティング」を設定し、各学級の課題について話し合いをもっています。生徒と教員の二人三脚による取組の成果が期待されるところです。

東部通信151号 (H30.9月) より